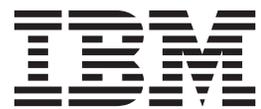


**IBM InfoSphere Information Services
Director**

バージョン 8 リリース 7

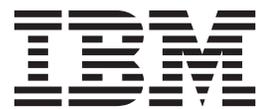
**管理およびデプロイメント・
ツールのガイド**



**IBM InfoSphere Information Services
Director**

バージョン 8 リリース 7

**管理およびデプロイメント・
ツールのガイド**



注記

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、57 ページの『特記事項および商標』に記載されている情報をお読みください。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： SC19-3482-00
IBM InfoSphere Information Services Director
Version 8 Release 7
Administration and Deployment Tool Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2011.10

© Copyright IBM Corporation 2006, 2011.

目次

IBM InfoSphere Information Services

Director コマンド・ライン・インターフェ

ース 1

InfoSphere Information Services Director コマンド・ラ イン・インターフェースの概要およびユーザー・ロー ル	1
コマンド・ライン・サポート	2
コマンド・ラインの制約	4
アプリケーションのインポートとエクスポート	5
アプリケーションのエクスポート	5
アプリケーションのインポート	7
アプリケーションの管理	10
サービス・プロバイダーを使用可能にする	10
サービス・プロバイダーを使用不可にする	11
アプリケーションのデプロイ	13
アプリケーションのアンデプロイ	13
アプリケーションのアップグレード	14
メタデータの更新	16
コマンド・リファレンス	21
EXPORT コマンド	22

IMPORT コマンド	24
ENABLE コマンド	28
DISABLE コマンド	31
DEPLOY コマンド	34
UNDEPLOY コマンド	36
UPGRADE コマンド	37
UPDATE コマンド	40

製品のアクセシビリティ 51

製品資料 53

他社の Web サイトへのリンク 55

特記事項および商標 57

IBM の窓口 61

索引 63

IBM InfoSphere Information Services Director コマンド・ライン・インターフェース

コマンド・ライン・インターフェースを使用して、アプリケーションやサービスなどの IBM® InfoSphere™ Information Services Director プロジェクト・リソースを管理およびデプロイできます。

コマンドを使用して、ある InfoSphere Information Services Director 環境からプロジェクト・リソースをエクスポートし、別の InfoSphere Information Services Director 環境にインポートして、既存プロジェクト・リソースのバックアップとリストア、および再使用を行います。

また、プロジェクト・リソースにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用可能および使用不可にしたり、プロジェクトのアプリケーションをデプロイおよびアンデプロイしたり、現在のサービス情報を使用してアプリケーションをアップグレードしたり、プロジェクト・リソース内のメタデータ情報を更新したりすることができます。

InfoSphere Information Services Director コマンド・ライン・インターフェースの概要およびユーザー・ロール

IBM InfoSphere Information Services Director 管理およびデプロイメント・コマンド・ライン・インターフェースからコマンドを実行して、InfoSphere Information Services Director リソース (アプリケーションやサービスなど) を管理します。このツールを使用して、InfoSphere Information Services Director の異なるインストール済み環境間でこれらのリソースを移動したり、これらのリソースをデプロイおよびアンデプロイしたり、これらのリソース内のメタデータ情報を変更したりすることができます。

ある InfoSphere Information Services Director 環境からプロジェクト・リソースを移動して、別の環境にデプロイする必要があるシナリオを以下に示します。

- システム障害時のリストアを可能にするため、またコンプライアンス目的のためにプロジェクト・リソースを別のコンピューターにバックアップする
- 開発環境、テスト環境、実稼働環境の間でプロジェクト・リソースを移動する
- 別の環境でプロジェクト・リソースを再作成する時間および費用を節減するために、プロジェクト・リソースを再使用する
- アップグレードした InfoSphere Information Services Director にプロジェクト・リソースをデプロイする
- 分散開発環境内の異なるシステムで開発されたサービスを単一のプロジェクトにマージしてデプロイする

コマンド・ライン・ツールで提供されているコマンドを使用して完了できる管理タスクは、以下のとおりです。

- プロジェクト・リソースにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用可能および使用不可にする
- プロジェクトのアプリケーションをデプロイおよびアンデプロイして、そのアプリケーションでのサービスに対するサービス要求を管理する
- 現在のサービス情報を使用してアプリケーションをアップグレードし、確実に最新の情報がパブリッシュされるようにする
- インポートされたメタデータ情報を更新し、確実に新しい環境内のメタデータ情報に一致するようにする

InfoSphere Information Services Director アドミニストレーター、 InfoSphere Information Services Director オペレーター、 および InfoSphere Information Services Director デザイナーのみが、 InfoSphere Information Services Director コマンド・ライン・アクションを実行するための適切な許可を備えたユーザー・ロールです。

InfoSphere Information Services Director アドミニストレーター

InfoSphere Information Services Director のアドミニストレーター・ロールを備えたユーザーは、すべての InfoSphere Information Services Director 機能にアクセスできます。

InfoSphere Information Services Director オペレーター

InfoSphere Information Services Director の実行時の機能にアクセスできます。オペレーターは、プロバイダーの追加と削除、デプロイされたアプリケーション、サービス、およびオペレーションの実行時のパラメーターの構成を行うことができます。また、オペレーターは、デザイン時ビューからアプリケーションをデプロイできます。

InfoSphere Information Services Director デザイナー

InfoSphere Information Services Director のデザイナー・ロールを備えたユーザーは、デザイン時に許可されたプロジェクトにのみアクセスできます。デザイン時のプロジェクト・レベルで、デザイナーは、プロジェクトの詳細およびプロジェクトのリストを表示したり、アプリケーションのリストを表示したり、アプリケーションを更新したり、アプリケーションをエクスポートしたり、サービスを既存のアプリケーションにインポートしたり、サービスを表示、追加、削除したりすることができます。

実行時には、InfoSphere Information Services Director デザイナーは、アプリケーションのリストを表示できます。

コマンド・ライン・サポート

IBM InfoSphere Information Services Director 管理およびデプロイメント・ツールは、 InfoSphere Information Services Director リソースに対する管理機能を向上させるコマンドを備えています。

実行時のアプリケーションおよびサービスで以下のコマンドを実行するには、ISD アドミニストレーターまたは ISD オペレーターの許可が必要です。 ISD オペレーターの許可により、IMPORT、EXPORT、および DEPLOY の各デザイン時コマンドを実行することはできますが、新規 IBM InfoSphere Information Services Director リソースを作成することはできません。

IMPORT コマンドおよび **EXPORT** コマンドを使用することで、テスト環境、開発環境、実稼働環境の間で、アプリケーションおよびサービスのすべてまたは選択したものをマイグレーションできます。

表 1. サポートされるマイグレーション・コマンド

コマンド	説明
ISDImportExport -action designtimeexport	ソース InfoSphere Information Services Director 環境から、プロジェクト内のアプリケーションおよびサービスのデザイン時のメタデータをエクスポートします。
ISDImportExport -action runtimeexport	ソース InfoSphere Information Services Director 環境から、実行時のアプリケーション・メタデータをエクスポートします。
ISDImportExport -action designtimeimport	ターゲット InfoSphere Information Services Director 環境に、プロジェクト内のアプリケーションおよびサービスのデザイン時のメタデータをインポートします。
ISDImportExport -action runtimeimport	ターゲット InfoSphere Information Services Director 環境に、実行時のアプリケーション・メタデータをインポートします。 デプロイされたアプリケーション内のアプリケーションとサービス・プロバイダーの情報をアップグレードします。
ISDImportExport -help	ISDImportExport コマンドの使用方法の詳細を表示します。大括弧 ([と]) 内の引数はオプションです。複数回使用できる引数の後には、アスタリスク (*) が付いています。引数の説明の後には、2 個のマイナス符号 (-) が付いています。

管理コマンドを使用して、プロジェクトのリソースおよび接続を変更できます。

表 2. サポートされる管理コマンド

コマンド	説明
ISDAdmin -action enable	デプロイ済みサービス・オペレーションにタッチされたサービス・プロバイダーを使用可能にします。
ISDAdmin -action disable	デプロイ済みサービス・オペレーションのサービス・プロバイダーを使用不可にします。
ISDAdmin -action deploy	プロジェクト内のアプリケーションをデプロイして、アプリケーション内のサービスでサービス要求を受け取ることができるようにします。 EAR ファイルを再生成して、アプリケーションをアップグレードおよび再デプロイします。

表 2. サポートされる管理コマンド (続き)

コマンド	説明
ISDAdmin -action undeploy	すべてのデプロイ済みアプリケーションまたは選択したデプロイ済みアプリケーションをアンデプロイします。
ISDAdmin -action update	別の環境にインポートしたプロジェクト・リソース内のアプリケーションおよびサービス・プロバイダーのメタデータ情報を更新します。このコマンドを使用して、以下を行うことができます。 <ul style="list-style-type: none"> • バルク・オペレーションを実行して、指定したプロバイダー・プロパティに基づいて、オペレーションやサービス・プロバイダーなどのアプリケーション・オブジェクトを更新する • 単一または指定したオペレーションまたはプロバイダーのオブジェクトを更新する • 情報サービス接続オブジェクトのバルク更新を実行する
ISDAdmin -help	ISDImportExport コマンドの使用方法の詳細を表示します。大括弧 ([と]) 内の引数はオプションです。複数回使用できる引数の後には、アスタリスク (*) が付いています。引数の説明の後には、2 個のマイナス符号 (-) が付いています。

コマンド・ラインの制約

このセクションでは、IBM InfoSphere Information Services Director 管理およびデプロイメント・コマンド・ライン・インターフェースでサポートされないアクションについて説明します。

IBM InfoSphere Information Server バージョン 8.5 の管理およびデプロイメント・コマンド・ライン・インターフェースの制約には、以下のものがあります。

- 実行時のエクスポートは、別のアプリケーション・サーバーまたは別のバージョンのアプリケーション・サーバーを使用する環境にはインポートできません。
- **EXPORT** コマンドは、単一のプロジェクト内の複数のアプリケーションから選択されたサービスおよびオペレーションをエクスポートできません。
- **UPDATE** コマンドは、以下のタイプの情報を同期できません。
 - プロジェクト、アプリケーション、サービス、およびオペレーションの名前と説明のメタデータ。
 - IBM DB2[®]、Oracle、および IBM InfoSphere Federation Server プロバイダーの列名と表名、および SQL 照会。
 - プロジェクト、アプリケーション、およびサービスのデザイン時のメタデータ。

- **ISDImportExport** コマンドまたは **ISDAdmin** コマンドで指定可能なオペレーション、サービス、およびアプリケーションの数は、階層によって制限されます。例を示します。
 - 複数のオペレーションをインポートまたはエクスポートできるのは、特定プロジェクト内の特定アプリケーションの特定の 1 つのサービス内である場合のみです。
 - 複数のサービスをインポートまたはエクスポートできるのは、特定プロジェクト内の特定アプリケーション内である場合のみです (また、このアクションでは、オペレーションは一切指定できません)。
 - 複数のアプリケーションをインポートまたはエクスポートできるのは、特定のプロジェクトに対してのみです (また、このアクションでは、サービスもオペレーションも一切指定できません)。

アプリケーションのインポートとエクスポート

EXPORT コマンドおよび **IMPORT** コマンドを使用することで、既存のアプリケーションを、IBM InfoSphere Information Services Director の別のインスタンスに移動できます。その後、**DEPLOY** コマンドを使用することで、InfoSphere Information Services Director 上にそれらのアプリケーションをデプロイできます。

InfoSphere Information Services Director アプリケーションを作成すると、アプリケーションおよびアプリケーションに含まれるサービスとオペレーションのデザイン時のメタデータが作成されます。そのアプリケーションをデプロイすることができます。デプロイすると、アプリケーションおよびそのサービスとオペレーションの実行時のメタデータが作成されます。InfoSphere Information Services Director 管理およびデプロイメント・ツールでは、デザイン時と実行時の両方のメタデータのインポート機能とエクスポート機能がサポートされています。

メタデータのエクスポートとインポートの考慮事項は、以下のとおりです。

- 実行時のメタデータを別の環境にインポートした場合には、新しいシステムでアプリケーションのデザインを変更できません。
- デザイン時のメタデータを別の環境にインポートした場合には、新しいシステムでアプリケーションのデザインを変更できます。

EXPORT コマンドおよび **IMPORT** コマンドは、InfoSphere Information Services Director のテスト環境、開発環境、実稼働環境間でアプリケーションを移動する場合に使用します。

アプリケーションのエクスポート

アプリケーションを、あるIBM InfoSphere Information Services Director 環境からエクスポートし、別の InfoSphere Information Services Director 環境にインポートすることで、別のシステム上にアプリケーションをバックアップまたはデプロイできます。

このタスクについて

EXPORT コマンドは、デザイン時および実行時のアプリケーションでサポートされません。

- デザイン時のプロジェクト・リソースに対しては、ISD デザイナー、ISD アドミニストレーター、または ISD オペレーターは、このコマンドを使用して、プロジェクトのすべてまたは選択したアプリケーションおよびサービスをエクスポートできます。エクスポートされるプロジェクトごと、また同じプロジェクトに属するアプリケーションのグループごとに、XML ファイルが生成されます。
- 実行時のアプリケーションに対しては、ISD アドミニストレーターおよび ISD オペレーターは、このコマンドを使用して、すべてまたは選択したアプリケーションをエクスポートできます。エクスポートされるアプリケーションごと、また同じアプリケーションに属するサービスのグループごとに、DAT ファイルが生成されます。

注: アプリケーション名およびサービス名はオプションです。指定しなければ、プロジェクト内のすべてのアプリケーションおよびそのサービスがエクスポートされます。**-omitPassword** オプションを使用して、デザイン時のエクスポートのエクスポートされる XML からパスワードを除外できます。また、**-omitPassword** オプションを使用して、実行時のエクスポートのエクスポートされる DAT ファイルからパスワードを除外できます。

手順

コマンド・ライン・エディターを開きます。

- デザイン時のアプリケーションおよびサービスをエクスポートするには、以下のコマンドを入力します。

```
ISDImportExport -action designtimeexport -user <ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード> -p <プロジェクト名>
-a <アプリケーション名> -s <サービス名>
-output <ターゲット XML ファイルの絶対パス名>
```

- 実行時のアプリケーションをエクスポートするには、以下のコマンドを入力します。

```
ISDImportExport -action runtimeexport -user <ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード> -a <アプリケーション名>
-output <ターゲット DAT ファイルの絶対パス名>
```

例

以下の例では、デザイン時のプロジェクト・リソースをエクスポートする方法について説明します。

プロジェクト内のすべてのデザイン時のアプリケーションをエクスポートするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action designtimeexport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -p <プロジェクト名> -output <エクスポートされた情報が入った XML ファイルが書き込まれるフォルダーまたはファイルの絶対パス名>
```

プロジェクト内の選択したデザイン時のアプリケーションをエクスポートするには、以下のようにします。

ISDImportExport -action designtimeexport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -p <プロジェクト名> -a <アプリケーション名 1> -a <アプリケーション名 2> -output <エクスポートされた情報が書き込まれる XML ファイルの絶対パス名>

プロジェクト内のデザイン時のアプリケーションから選択したサービスをエクスポートするには、以下のようにします。

ISDImportExport -action designtimeexport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -s <サービス名 1> -p <プロジェクト名> -a <アプリケーション名> -s <サービス名 2> -output <エクスポートされた情報の入った XML ファイルが書き込まれるフォルダーの絶対パス名>

プロジェクト内のすべてのデザイン時のアプリケーションをエクスポートするが、エクスポートされた成果物からパスワードを除外するには、以下のようにします。

ISDImportExport -action designtimeexport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -omitPassword -p <プロジェクト名> -output <エクスポートされた情報が入った XML ファイルが書き込まれるフォルダーの絶対パス名>

以下の例では、実行時のアプリケーションをエクスポートする方法について説明します。

複数の実行時のアプリケーションをエクスポートするには、以下のようにします。

ISDImportExport -action runtimeexport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -a <アプリケーション名 1> -a <アプリケーション名 2> -a <アプリケーション名 3> -output <エクスポートされた情報が入った、アプリケーションごとに生成される DAT ファイルが書き込まれるフォルダーの絶対パス名>

実行時のアプリケーションをエクスポートするが、エクスポートされたリソースからパスワードを除外するには、以下のようにします。

ISDImportExport -action runtimeexport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -omitPassword -a <アプリケーション名> -output <エクスポートされた情報が入った、アプリケーションごとに生成される DAT ファイルが書き込まれるフォルダーの絶対パス名>

アプリケーションのインポート

IBM InfoSphere Information Services Director からアプリケーションをエクスポートした後には、別のシステムにバックアップまたはデプロイするために、別の InfoSphere Information Services Director 環境にそのアプリケーションをインポートできます。

このタスクについて

IMPORT コマンドは、デザイン時および実行時のアプリケーションでサポートされます。このコマンドは、検出された一致成果物を置き換えるように構成できます。

- デザイン時のインポートに対しては、ISD デザイナー、ISD アドミニストレーター、または ISD オペレーターは、このコマンドを使用して、入力 XML ファイルから、すべてまたは選択した既存のアプリケーションおよびサービスをインポ

ートできます。デザイン時のメタデータのインポート先プロジェクトの名前を指定することができます。または、入力 XML ファイルに定義されたプロジェクト名を使用することもできます。ターゲット・システム上にプロジェクトが存在しない場合には、インポートしてターゲット・システム上にプロジェクトを作成できるのは、ISD アドミニストレーター・ロールを備えたユーザーのみになりません。

- 実行時のインポートでは、すべてのプロバイダーがデフォルトで使用不可になります。実行時のインポートでプロバイダーを使用可能にするには、実行時のインポート・コマンドで、**-enableProvider** パラメーターを指定する必要があります。情報のインポート先アプリケーションの名前は、入力 DAT ファイルに定義されているものになります。

重要: (例えば、データベース・プロバイダーで使用されるデータベースのポート番号、ユーザー ID、またはパスワードが、エクスポート元とインポート先のシステムで同じではない場合など) プロバイダーを使用可能にする前にメタデータを更新する必要があるため、プロバイダーはデフォルトで使用不可になっています。プロバイダーを使用可能にする前に、インポートするすべてのプロバイダー・メタデータが、インポート先システムのプロバイダー・メタデータに一致していることを確認してください。

手順

コマンド・ライン・エディターを開きます。

- デザイン時のアプリケーションおよびサービスをインポートするには、以下のコマンドを入力します。

```
ISDImportExport -action designtimeimport -user <ユーザー名>  
-password <ユーザー・パスワード> -project <プロジェクト名>  
-input <ソース XML ファイルの絶対パス名>
```

- 実行時のアプリケーションをインポートするには、以下のコマンドを入力します。

```
ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名>  
-password <ユーザー・パスワード>  
-input <ソース DAT ファイルの絶対パス名>
```

例

以下の例では、デザイン時のアプリケーションおよびサービスをインポートする方法について説明します。

入力 XML ファイル内に入っているすべての既存の成果物をインポートするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action designtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -input <エクスポートされた情報を読み取る XML ファイルの絶対パス名>
```

プロジェクト内の選択したデザイン時のアプリケーションをインポートするには、以下のようにします。

ISDImportExport -action designtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -a <アプリケーション名 1> -a <アプリケーション名 2> -input <エクスポートされた情報を読み取る XML ファイルの絶対パス名>

プロジェクト内のデザイン時のアプリケーションから選択したサービスをインポートするには、以下のようにします。

ISDImportExport -action designtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -a <アプリケーション名> -s <サービス名 1> -s <サービス名 2> -input <エクスポートされた情報を読み取る XML ファイルの絶対パス名>

入力 XML ファイル内のすべての既存成果物をインポートし、検出された一致プロジェクトの名前を変更するには、以下のようにします。

ISDImportExport -action designtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -rename -input <エクスポートされた情報を読み取る XML ファイルの絶対パス名>

注: -rename パラメーターは、単なる切り替えオプションであり、値は受け付けません。このコマンド例では、成果物をインポートし、現行タイム・スタンプを古い名前に追加することによって、一致プロジェクトの名前を変更します。

入力 XML ファイル内のすべての既存成果物をインポートし、検出された一致プロジェクトを置き換えるには、以下のようにします。

ISDImportExport -action designtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -replace -input <エクスポートされた情報を読み取る XML ファイルの絶対パス名>

入力 XML ファイル内にあるすべての既存成果物を指定した既存プロジェクトにインポートするには、以下のようにします。

ISDImportExport -action designtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -project <プロジェクト名> -input <エクスポートされた情報を読み取る XML ファイルの絶対パス名>

以下の例では、実行時のアプリケーションをインポートする方法について説明します。アプリケーションのサービス・プロバイダーは、使用可能にする前にメタデータ情報を更新できるようにするため、インポート時には使用不可になります。

サービス・プロバイダーを使用可能にせずに、指定したフォルダー内のすべての実行時のアプリケーションをインポートするには、以下のようにします。

ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -input <エクスポートされた情報が入った DAT ファイルを読み取るフォルダーの絶対パス名>

実行時のアプリケーションをインポートし、そのサービス・プロバイダーを使用可能にするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -enableProvider -input <エクスポートされた情報を読み取るDAT ファイルの絶対パス名>
```

アプリケーションの管理

IBM InfoSphere Information Services Director プロジェクト・リソースをアップグレードおよびデプロイし、そのリソースのためにサービス・プロバイダーを使用可能にできます。

管理コマンドを使用することで、InfoSphere Information Services Director 上のプロジェクト・リソースを管理します。

注: 例では、不等号括弧および不等号括弧内の情報を、実際のキーおよび値で置き換えてください。例えば、IBM InfoSphere DataStage® ユーザー ID を更新するためにキーを指定する場合には、コマンド・ラインの「**-key <キー値>**」を「**-key DS_USERID**」と置き換えます。

サービス・プロバイダーを使用可能にする

デプロイ済みの IBM InfoSphere Information Services Director サービス・オペレーションにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用可能にすることができます。

このタスクについて

ENABLE コマンドは、以下の実行時のアプリケーション・リソースでサポートされません。

- すべてのアプリケーションまたは選択したアプリケーション
- 選択したアプリケーション内のすべてのサービス
- 選択したエージェント・ホスト
- 特定のエージェント・ホストの選択したサービス・プロバイダー・タイプ
- 特定のエージェント・ホストの選択したサービス・プロバイダー・ホスト

手順

1. コマンド・ライン・エディターを開きます。
2. 選択したオペレーションを対象とする場合は、以下のコマンドを入力します。

```
ISDAdmin -action enable -user <ユーザー名>  
-password <ユーザー・パスワード>  
-a <アプリケーション名> -s <サービス名> -o <オペレーション名>
```

3. バルク・オペレーションを対象とする場合は、以下のコマンドを入力します。

```
ISDAdmin -action enable -user  
<ユーザー名>  
-password <ユーザー・パスワード>  
-agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名>  
-providerType <サービス・プロバイダー・タイプ>  
-providerHost <サービス・プロバイダー・サーバー・ホスト名>
```

例

以下の例では、サービス・プロバイダーを使用可能にする方法について説明します。

指定したアプリケーション内のサービスにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用可能にするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action enable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名>
```

複数のアプリケーション内のサービスにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用可能にするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action enable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名 1> -a <アプリケーション名 2>
```

指定したアプリケーション内の選択したサービスにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用可能にするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action enable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名> -s <サービス名 1> -s<サービス名 2> -s <サービス名 3>
```

特定のエージェント・サーバー・ホストのすべてのアプリケーションおよびサービス全体のサービス・プロバイダーを使用可能にするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action enable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名>
```

特定のエージェント・サーバー・ホスト、プロバイダー・タイプ、およびプロバイダー・サーバー・ホストのすべてのアプリケーションおよびサービス全体のサービス・プロバイダー・タイプを使用可能にするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action enable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名> -providerType <サービス・プロバイダー・タイプ>
-providerHost <サービス・プロバイダー・サーバー・ホスト名>
```

サービス・プロバイダーを使用不可にする

デプロイ済みの IBM InfoSphere Information Services Director サービス・オペレーションにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用不可にすることができます。

このタスクについて

DISABLE コマンドは、以下の実行時のアプリケーション・リソースでサポートされます。

- すべてのアプリケーションまたは選択したアプリケーション
- 選択したアプリケーション内のすべてのサービス
- 選択したエージェント・ホスト

- 特定のエージェント・ホストの選択したサービス・プロバイダー・タイプ
- 特定のエージェント・ホストの選択したサービス・プロバイダー・ホスト

手順

1. コマンド・ライン・エディターを開きます。
2. 選択したオペレーションを対象とする場合は、以下のコマンドを入力します。

```
ISDAdmin -action disable -user
<ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名> -s <サービス名> -o <オペレーション名>
```

3. バルク・オペレーションを対象とする場合は、以下のコマンドを入力します。

```
ISDAdmin -action disable -user
<ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード>
-agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名>
-providerType <サービス・プロバイダー・タイプ>
-providerHost <サービス・プロバイダー・サーバー・ホスト名>
```

例

以下の例では、サービス・プロバイダーを使用不可にする方法について説明します。

指定したアプリケーション内のサービスにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用不可にするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action disable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
> -a <アプリケーション名>
```

複数のアプリケーション内のサービスにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用不可にするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action disable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
> -a <アプリケーション名 1> -a <アプリケーション名 2>
```

指定したアプリケーション内の選択したサービスにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用不可にするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action disable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
> -a <アプリケーション名> -s <サービス名 1> -s<サービス名 2> -s <サービス名 3>
```

特定のエージェント・サーバー・ホストのすべてのアプリケーションおよびサービス全体のサービス・プロバイダーを使用不可にするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action disable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
> -agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名>
```

特定のエージェント・サーバー・ホスト、プロバイダー・タイプ、およびプロバイダー・サーバー・ホストのすべてのアプリケーションおよびサービス全体のサービス・プロバイダー・タイプを使用不可にするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action disable -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名> -providerType <サービス・プロバイダー・タイプ>
-providerHost <サービス・プロバイダー・サーバー・ホスト名>
```

アプリケーションのデプロイ

IBM InfoSphere Information Services Director プロジェクトのアプリケーションをデプロイすることで、アプリケーション内のサービスでサービス要求を受け取れるようにすることができます。

このタスクについて

DEPLOY コマンドは、デザイン時のアプリケーション内のすべてのサービスまたは選択したサービスでサポートされます。

手順

1. コマンド・ライン・エディターを開きます。
2. 以下のコマンドを入力します。

```
ISDAdmin -action deploy -user <ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード>
-p <プロジェクト名> -a <アプリケーション名>
```

例

以下の例では、アプリケーションをデプロイする方法について説明します。同じ名前前のアプリケーションが既にデプロイされていた場合には、警告が表示されて、その新しいアプリケーションはデプロイされません。

デザイン時のアプリケーション内のすべてのサービスをデプロイするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action deploy -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-p <プロジェクト名> -a <アプリケーション名>
```

既存のアプリケーションを再デプロイするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action deploy -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-replace -p <プロジェクト名> -a <アプリケーション名>
```

サービス・プロバイダー情報を変更せずに EAR ファイルを置き換えることで既存のアプリケーションをアップグレードする場合には、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action deploy -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-replace -preserveProvider -p <プロジェクト名> -a <アプリケーション名 1> -a
<アプリケーション名 2> -a <アプリケーション名 3>
```

アプリケーションのアンデプロイ

IBM InfoSphere Information Services Director のアプリケーションをアンデプロイできます。

このタスクについて

UNDEPLOY コマンドは、実行時のアプリケーションでサポートされます。

手順

1. コマンド・ライン・エディターを開きます。
2. 以下のコマンドを入力します。

```
ISDAdmin -action undeploy -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名>
```

例

以下の例では、複数のアプリケーションをアンデプロイする方法について説明します。

```
ISDAdmin -action undeploy -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名 1> -a <アプリケーション名 2> -a <アプリケーション名 3>
```

アプリケーションのアップグレード

デプロイ済み IBM InfoSphere Information Services Director アプリケーション内のアプリケーションおよびサービスの情報をアップグレードできます。

このタスクについて

実行時のアプリケーションで、そのアプリケーション用に生成された EAR ファイル内の成果物をアップグレードできるように、アップグレード処理がサポートされています。アプリケーション用に EAR ファイルが再生成されます。

アプリケーションをアップグレードする理由をいくつか以下に示します。

- 別のフィックスパック/パッチ・レベルで実行している環境にアプリケーションを移動する場合。 ISDImportExport -action runtimeimport コマンドを使用して、アプリケーションのアップグレードを実行します。
- デプロイ済みアプリケーションをホストしている環境に新しいパッチ/フィックスパックがインストールされている場合。このシナリオでは、ISDAdmin -action deploy コマンドを使用します。

アプリケーションをアップグレードする際には、以下のオプションを使用できません。

- オプション 1 - 入力 DAT ファイル内にあるアプリケーションおよびサービス・プロバイダーの情報を使用して、アプリケーションとサービス・プロバイダーの両方の情報を更新できます。このオプションでは、一致アプリケーションを処理するために **replace** パラメーターを指定して、ISDImportExport -action runtimeimport コマンドを使用します。
- オプション 2 - 既存のサービス・プロバイダー情報を置き換えずにアプリケーションを更新できます。このオプションでは、**replace** パラメーターおよび **preserveProvider** パラメーターを指定して、ISDImportExport -action runtimeimport コマンドを使用し、サービス・プロバイダー情報を変更せずに、入力 DAT ファイル内のアプリケーションをデプロイします。

- オプション 3 - EAR ファイルを再生成することで、サービス・プロバイダー情報を変更せずにアプリケーションを更新および再デプロイできます。このオプションでは、アップグレードするアプリケーションの名前を入力として使用します。アプリケーションを再デプロイできるように、デザイン・メタデータが環境内で使用可能である必要があります。このオプションでは、**replace** パラメーターおよび **preserveProvider** パラメーターを指定して、ISDAdmin -action deploy コマンドを使用し、サービス・プロバイダー情報を変更せずに新規 EAR ファイルをデプロイします。

手順

1. コマンド・ライン・エディターを開きます。
2. 該当するアップグレード・オプションに対応する以下のコマンドを入力します。
 - アプリケーションとそのサービス・プロバイダー情報の両方をアップグレードするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード> -replace
-input <ソース DAT フォルダの絶対パス名>
```

- 入力 DAT ファイルを使用して、アプリケーションのみをアップグレードするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード> -replace -preserveProvider
-input <ソース DAT フォルダの絶対パス名>
```

- EAR ファイルを再生成して、アプリケーションのみをアップグレードおよび再デプロイするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action deploy -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-replace -preserveProvider -p <プロジェクト名> -a <アプリケーション名 1>
-a <アプリケーション名 2>
```

例

アプリケーションおよびそのサービス・プロバイダー情報の両方をアップグレードするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-replace -input <新しい情報を読み取る DAT フォルダの絶対パス名>
```

入力 DAT ファイルを使用して、アプリケーションのみをアップグレードするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-replace -preserveProvider -input <新しい情報を読み取る DAT フォルダの絶対パス名>
```

EAR ファイルを再生成することで、アプリケーションのみをアップグレードおよび再デプロイするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action deploy -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-replace -preserveProvider -project <プロジェクト名> -a <アプリケーション名 1>
-a <アプリケーション名 2>
```

メタデータの更新

メタデータを更新し、確実に新しい IBM InfoSphere Information Services Director 環境内のメタデータに一致するようにします。InfoSphere Information Services Director リソースを新しい環境にインポートした後に、**UPDATE** コマンドを実行して、インポートされたメタデータと新しい環境内のメタデータとを同期します。

始める前に

リソースのメタデータを更新するには、その前に、オペレーションまたは情報プロバイダーを使用不可にする必要があります。デザイン時にインポートされたアプリケーションをデプロイする場合には、**DISABLE** コマンドを実行して、情報プロバイダーを使用不可にします。実行時にエクスポートされたアプリケーションをインポートする場合には、アプリケーションは自動的に使用不可になります。

このタスクについて

- **UPDATE** コマンドは、実行時のアプリケーションおよび情報サービス接続でのみサポートされます。
- 一度に更新できるメタデータ属性は 1 つのみです。複数のメタデータ属性を更新する場合には、属性ごとに個別の **UPDATE** コマンドを実行する必要があります。
- このコマンドは、3 つの方法 (アプリケーション用、エージェント・ホスト用、または接続名用) で使用できます。方法ごとに、必須オプションおよび任意指定のオプションが異なります。入力するメタデータ **UPDATE** コマンドごとに、オプション (**-agenthost**、**-application**、または **-cname**) を 1 つ指定する必要があります。

手順

1. コマンド・ライン・エディターを開きます。
2. 該当するコマンドを実行して、アプリケーション、エージェント・ホスト名、または接続名でメタデータを更新します。

注: このコマンドの必須パラメーターおよびオプション・パラメーターのリストは、3 つの方法のうちどれを使用するかによって異なります。必須パラメーターおよびオプション・パラメーターのリストについては、コマンド・リファレンス資料の「**UPDATE** コマンド」を参照してください。

- アプリケーションでメタデータを更新するには、以下のコマンドを使用します。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名> -s <サービス名> -o <オペレーション名>
-key <更新するメタデータ属性のキー>
-subkey <変更するジョブ・パラメーターの引数>
-oldvalue <変更する属性の古い値>
-newvalue <変更する属性の新しい値>
-dsproject <プロジェクト名> -dsjob <ジョブ名>
-providerUser <サービス・プロバイダー>
```

- エージェント・ホスト名でメタデータを更新するには、以下のコマンドを使用します。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-agentHost <エージェント・ホスト名> -providerType <DS、DB2、ORA、または DB2CF>
-providerHost <サービス・プロバイダー・サーバー・ホスト名>
-key <更新するメタデータ属性のキー>
```

```
-subkey <変更するジョブ・パラメーターの引数>  
-oldvalue <変更する属性の古い値>  
-newvalue <変更する属性の新しい値>  
-dsproject <プロジェクト名> -dsjob <ジョブ名>  
-providerUser <サービス・プロバイダー>
```

- 接続名でメタデータを更新するには、以下のコマンドを使用します。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>  
-cname <接続名> -key <更新するメタデータ属性のキー>  
-oldvalue <変更する属性の古い値>  
-newvalue <変更する属性の新しい値>
```

メタデータの更新例

このセクションでは、以下のシナリオの例を示します。

- プロバイダー固有メタデータのバルク更新
- サービス・プロバイダー・メタデータのバルク更新
- オペレーション・メタデータのバルク更新
- IBM InfoSphere Information Server 接続メタデータの更新
- IBM InfoSphere Information Services Director ジョブ・パラメーターの更新

プロバイダー固有メタデータのバルク更新の例

以下のコマンドで、IBM InfoSphere DataStage メタデータおよび DB2 メタデータを例として使用し、プロバイダーのバルク・メタデータ更新の方法を示します。

- 特定のエージェント・ホストおよび InfoSphere DataStage ユーザー ID の InfoSphere DataStage パスワードを更新するには、以下のようになります。

注: 識別子 (エージェント・ホストとユーザー ID の組み合わせ) で更新対象のキーが一意的に限定されるため、**-oldvalue** パラメーターはオプションです。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード>  
-agentHost <エージェント・ホスト名> -key DS_PASSWORD  
-providerUser <DataStage ユーザー ID> -oldvalue <古い DataStage パスワード>  
-newvalue <新しい DS パスワード>
```

- 特定のエージェント・ホストの InfoSphere DataStage ユーザー ID を更新するには、以下のようになります。

注: **-oldvalue** パラメーターを使用して、更新するユーザー ID を指定する必要があります。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード>  
-agentHost <エージェント・ホスト名> -key DS_USERID  
-oldvalue <古い DataStage ユーザー ID> -newvalue <新しい DataStage ユーザー ID>
```

- 特定のエージェント・ホストおよびプロジェクトの InfoSphere DataStage ジョブ名を更新するには、以下のようになります。

注: **-oldvalue** パラメーターを使用して、更新するジョブ名を指定する必要があります。

ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost -key DS_JOBNAME -dsproject <DataStage プロジェクト名> -oldvalue <古いジョブ名> -newvalue <新しいジョブ名>

- 特定のエージェント・ホストの DataStage プロジェクト名を更新するには、以下のようにします。

注: **-oldvalue** パラメーターを使用して、更新する InfoSphere DataStage プロジェクト名を指定する必要があります。

ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key DS_PROJECT_NAME -oldvalue <古い DS プロジェクト名> -newvalue <新しい DS プロジェクト名>

- 特定の InfoSphere DataStage ホストのエージェント・ホストを更新するには、以下のようにします。

注: 特定の 1 つのエージェントで複数の InfoSphere DataStage ホストを設定することはできないため、このシナリオでは、**-oldvalue** パラメーターは必要ありません。

ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key AGENT_HOST -providerHost <DS サーバー・ホスト名> -newvalue <新しいエージェント・ホスト名>

- 特定のエージェント・ホストの InfoSphere DataStage ポート番号を更新するには、以下のようにします。

ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key DS_PORT -newvalue <新しい DS サーバー・ポート番号>

- 特定のエージェント・ホストの DB2 ホスト名を更新するには、以下のようにします。

注: **-oldvalue** パラメーターを使用して、更新する DB2 ホスト名を指定する必要があります。

ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key DB2_HOST -oldvalue <古い DB2 サーバー・ホスト名> -newvalue <新しい DB2 サーバー・ホスト名>

- 特定のエージェント・ホストおよび DB2 ホストの DB2 ポート番号を更新するには、以下のようにします。

注: **-oldvalue** パラメーターを使用して、更新するポート番号を指定する必要があります。

ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key DB2_PORT -providerHost <DB2 サーバー・ホスト名> -oldvalue <古い DB2 サーバー・ポート番号> -newvalue <新しい DB2 サーバー・ポート番号>

- 特定のエージェント・ホストおよび DB2 ホストの DB2 データベース名を更新するには、以下のようにします。

注: **-oldvalue** パラメーターを使用して、更新するデータベース名を指定する必要があります。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key DB2_DATABASE -providerHost <DB2 サーバー・ホスト名> -oldvalue <古い DB2 データベース名> -newvalue <新しい DB2 データベース名>
```

- 特定のエージェント・ホストおよび DB2 ホストの DB2 ユーザー ID を更新するには、以下のようにします。

注: **-oldvalue** パラメーターを使用して、更新するユーザー ID を指定する必要があります。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key DB2_USERID -providerHost <DB2 サーバー・ホスト名> -oldvalue <古い DB2 ユーザー ID> -newvalue <新しい DB2 ユーザー ID>
```

- 特定のエージェント・ホスト、DB2 ホスト、および DB2 ユーザー ID の DB2 パスワードを更新するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key DB2_PASSWORD -providerHost <DB2 サーバー・ホスト名> -providerUser <DB2 ユーザー ID> -oldvalue <古い DB2 パスワード (providerUser パラメーターを使用するためオプション)> -newvalue <新しい DB2 パスワード>
```

サービス・プロバイダー・メタデータのバルク更新の例

以下のコマンドで、サービス・プロバイダー・メタデータの更新方法を示します。

以下の例では、**-oldvalue** パラメーターはオプションです。このパラメーターを使用して、特定の値を 1 つだけ更新することもできます。

- 特定のエージェント・ホストのアプリケーション全体のすべての InfoSphere DataStage サービス・プロバイダーの活動化しきい値を変更するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key ACTIVATION_THRESHOLD -providerType DS -oldvalue <古い活動化しきい値> -newvalue <新しい活動化しきい値>
```

- 特定のエージェント・ホストのアプリケーション全体の特定の DB2 サービス・プロバイダーのアクティベーション遅延を変更するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -providerType DB2
```

```
-key ACTIVATION_DELAY -oldvalue <古いアクティベーション遅延>  
-newvalue <新しいアクティベーション遅延>
```

- 特定のエージェント・ホストのアプリケーション全体の特定のホスト内に存在する特定の DB2 サービス・プロバイダーのアクティベーション遅延を変更するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・  
パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -providerType DB2  
-key ACTIVATION_DELAY -providerHost <DB2 サーバー・ホスト名>  
-oldvalue <古いアクティベーション遅延> -newvalue <新しいアクティベ  
ーション遅延>
```

- 指定したアプリケーションおよびサービス内のすべてのオペレーションの最大アイドル時間を変更するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・  
パスワード> -a <アプリケーション名> -s <サービス名> -key MAX_IDLE  
-oldvalue <古い最大アイドル> -newvalue <新しい最大アイドル>
```

オペレーション・メタデータのバルク更新の例

以下のコマンドで、オペレーション・メタデータのバルク更新を示します。

以下の例では、**-oldvalue** パラメーターはオプションです。このパラメーターを使用して、特定の値を 1 つだけ更新することもできます。

- 特定のエージェント・サーバー・ホストのすべてのオペレーションのロード・バランサーを変更するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・  
パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key LOAD_BALANCER  
-oldvalue <古いロード・バランサー> -newvalue <新しいロード・バラン  
サー>
```

- アプリケーション内の指定したサービスのすべてのオペレーションの最大試行回数を変更するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・  
パスワード> -a <アプリケーション名> -s <サービス名> -key  
MAX_RETRIES -oldvalue <古い最大試行回数> -newvalue <新しい最大試行  
回数>
```

共通プロバイダーの更新例

以下のコマンドで、共通プロバイダーのメタデータの更新方法を示します。

- 特定のエージェント・ホストのエージェント・サーバー・ポート番号を更新するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・  
パスワード> -agentHost <エージェント・ホスト名> -key AGENT_PORT  
-newvalue <新しいエージェント・サーバー・ポート番号>
```

IBM InfoSphere Information Server 接続メタデータの更新例

以下のコマンドで、接続のメタデータの更新方法を示します。

- 特定の接続の DataStage または DB2 ユーザー ID を更新するには、以下のようになります。ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -password <ユーザー・パスワード> -cname <接続名> -key USER -oldvalue <古い DS ユーザー ID または古い DB2 ユーザー ID> -newvalue <新しい DS または DB2 ユーザー ID>

IBM InfoSphere Information Services Director ジョブ・パラメーターの更新例

以下のコマンドで、IBM InfoSphere Information Services Director ジョブ・パラメーターの更新方法を示します。

- IBM InfoSphere Information Services Director ジョブ・パラメーターを更新するには、以下のようになります。

注: サービス名およびオペレーション名を指定しなければ、アプリケーション内で一致したすべてのものが更新されます。InfoSphere DataStage プロジェクト名およびジョブ名を使用して、更新でオペレーションにアタッチされる特定のプロジェクトまたはジョブを指定できます。

以下の例では、**-oldvalue** パラメーターはオプションです。このパラメーターを使用して、特定の値を 1 つだけ更新することもできます。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -pw <ユーザー・パスワード> -a <アプリケーション名> -s <サービス名> -o <オペレーション名> -dsproject <DataStage プロジェクト名> -dsjob <DataStage ジョブ名> -key JOB_PARAMETER -subkey <値を更新する特定のジョブ・パラメーター> -oldvalue <古い値> -newvalue <変更するジョブ・パラメーターの新しい値>
```

- バルク・シナリオで複数のアプリケーションのジョブ・パラメーター値を更新するには、以下のようになります。ISDAdmin -action update -user <ユーザー ID> -pw <ユーザー・パスワード> -agenthost <エージェント・ホスト名> -dsproject<DataStage プロジェクト名> -dsjob <DataStage ジョブ名> -key JOB_PARAMETER -subkey <値を変更する特定のジョブ・パラメーター>

次のタスク

メタデータの更新が完了したら、ENABLE コマンドを実行して、情報プロバイダーを使用可能にします。

コマンド・リファレンス

IBM InfoSphere Information Services Director 管理およびデプロイメント・コマンドは、コマンド・ライン・インターフェースから実行します。

コマンド・リファレンスを使用することで、各 InfoSphere Information Services Director ツール・コマンドに関する、構文の例やパラメーターの説明などの詳細情報が得られます。

注: 例では、不等号括弧および不等号括弧内の情報を、実際のキーおよび値で置き換えてください。例えば、IBM InfoSphere DataStage ユーザー ID を更新するためにキーを指定する場合には、コマンド・ラインの「**-key <キー値>**」を「**-key DS_USERID**」と置き換えます。

EXPORT コマンド

このコマンドを使用して、IBM InfoSphere Information Services Director からリソースをエクスポートできます。

目的

EXPORT コマンドは、アプリケーションおよびアプリケーションから選択したサービスをエクスポートします。このコマンドは、デザイン時および実行時のアプリケーションでサポートされます。

構文

デザイン時のアプリケーションの場合、以下の構文を使用します。

```
ISDImportExport -action designtimeexport -user <ユーザー名>  
-password <ユーザー・パスワード>  
-p <プロジェクト名> -a <アプリケーション名> -s <サービス名> -omitPassword  
-output <ターゲット XML ファイルの絶対パス名>
```

実行時のアプリケーションの場合、以下の構文を使用します。

```
ISDImportExport -action runtimeexport -user <ユーザー名>  
-password <ユーザー・パスワード>  
-a <アプリケーション名> -omitPassword  
-output <ターゲット DAT ファイルの絶対パス名>
```

パラメーター

EXPORT コマンドでは、以下のパラメーターが使用可能です。

表3. EXPORT コマンドのパラメーター

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-action (-act)	必須 以下のアクション・コマンドを入力します。 <ul style="list-style-type: none">デザイン時のアプリケーションの場合、<code>designtimeexport</code> または <code>dte</code> と入力します。実行時のアプリケーションの場合、<code>runtimeexport</code> または <code>rte</code> と入力します。
-user (-ur)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。
-password (-pw)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。
-project (-p)	<code>designtimeexport</code> の場合にのみ必須。 アプリケーションのエクスポート元プロジェクトの名前を入力します。

表 3. EXPORT コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-application (-a)	<p>runtimeexport の場合に必須。</p> <p>designtimeexport の場合はオプション。</p> <p>プロジェクト内にある、エクスポートするアプリケーションの名前を入力します。</p>
-service (-s)	<p>designtimeexport の場合にのみオプション。 runtimeexport の場合は適用外。</p> <p>アプリケーション内にある、エクスポートするサービスの名前を入力します。</p>
-omitPassword (-o)	<p>オプション。</p> <p>エクスポートされた情報からすべてのパスワードを除外します。</p> <p>セキュリティのため、この設定を使用して、エクスポートされたファイルからユーザー証明情報を除外します。</p>
-output (-out)	<p>必須</p> <p>エクスポートされた情報が書き込まれるファイルまたはフォルダーの絶対パス名を入力します。</p> <p>ファイル名ではなくフォルダーを指定した場合には、生成されるファイル名は、デザイン時のメタデータの場合にはプロジェクト名、実行時のメタデータの場合にはアプリケーション名になります。</p>
-verbose (-v)	<p>オプション。</p> <p>詳細なランタイム出力 (ランタイム・ロギング・メッセージではない) を表示します。</p>
-results (-res)	<p>オプション。</p> <p>すべてのランタイム出力を指定されたファイルに出力します。</p>
-log (-l)	<p>オプション。</p> <p>すべてのランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。このオプションは、-loglevel とともに使用します。</p>
-logerror (-error)	<p>オプション。</p> <p>すべての ERROR および FATAL の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。</p>

表 3. EXPORT コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-loginfo (-info)	オプション。 すべての INFO、WARN、DEBUG、および TRACE の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。
-loglevel (-level)	オプション。 出力するロギング・レベルを 1 つ指定します (ALL、TRACE、DEBUG、INFO、WARN、ERROR、FATAL、または OFF)。
-help (-?)	オプション。 このコマンドのヘルプを表示します。

IMPORT コマンド

このコマンドを使用することで、エクスポートされたアプリケーションおよびサービスを、バックアップまたはデプロイするために、別の IBM InfoSphere Information Services Director に移動できます。

目的

IMPORT コマンドは、デザイン時と実行時の両方のアプリケーションおよびサービスをインポートします。検出された一致アプリケーションを置き換えるように、**IMPORT** コマンドを構成できます。

構文

デザイン時のアプリケーションをインポートするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action designtimeimport -user <ユーザー名>
                -password <ユーザー・パスワード>
                -project <プロジェクト名> -application <アプリケーション名>
                -input <ソース XML ファイルの絶対パス名>
```

実行時のアプリケーションをインポートして、そのサービス・プロバイダーを使用可能にするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名>
                -password <ユーザー・パスワード>
                -enableProvider -input <ソース DAT ファイルの絶対パス名>
```

パラメーター

IMPORT コマンドでは、以下のパラメーターが使用可能です。

表 4. **IMPORT** コマンドのパラメーター

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-action (-act)	必須 以下のアクション・コマンドを入力します。 <ul style="list-style-type: none">• デザイン時のアプリケーションの場合、<code>designtimeimport</code> または <code>dti</code> と入力します。• 実行時のアプリケーションの場合、<code>runtimeimport</code> または <code>rti</code> と入力します。
-user (-ur)	必須 IBM InfoSphere Information Server ユーザー ID を入力します。
-password (-pw)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。
-rename (-ren)	<code>designtimeimport</code> の場合にのみオプション。 <code>runtimeimport</code> の場合は適用外。 一致するリソース (アプリケーションやサービスなど) が存在する場合には、そのリソースの新しい名前が自動的に生成されます。リソースの既存名にタイム・スタンプが付加されて、固有の名前が作成されます。一致は、指定された最低のオプションで解決されます。例えば、アプリケーションとサービスがコマンドで指定された場合には、一致はサービス・レベルで行われます。 -rename パラメーターも -replace パラメーターも使用しなかった場合には、一致するリソース (アプリケーションまたはサービス) が検出されると、警告が表示されて、その新しいリソースはインポートされません。インポートするリソースがさらに存在する場合には、 IMPORT コマンドの処理は、次のリソースに移行します。

表 4. IMPORT コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
<p>-replace (-rep)</p>	<p>オプション。</p> <p>インポートされるアプリケーションの名前が、システム上の既存アプリケーションと同じである場合には、既存アプリケーションが削除されて、同じ名前の新規アプリケーションがインポートされたファイルから作成されます。</p> <p>-replace パラメーターも -rename パラメーターも使用しなかった場合には、一致アプリケーションが検出されると、警告が表示されて、その新規アプリケーションはインポートされません。インポートするアプリケーションがさらに存在する場合には、IMPORT コマンドの処理は、次のアプリケーションに移行します。</p>
<p>-preserveProvider (-prp)</p>	<p>runtimeimport の場合にのみオプション。 designtimeimport の場合は適用外。</p> <p>-preserveProvider パラメーターを -replace パラメーターとともに使用することで、一致 EAR ファイルのみが置き換えられ、情報サービス・プロバイダーの情報はそのままになります。</p> <p>-preserveProvider パラメーターを有効にするには、-replace パラメーターとともに使用する必要があります。</p>
<p>-enableProvider (-enp)</p>	<p>runtimeimport の場合にのみオプション。 designtimeimport の場合は適用外。</p> <p>このパラメーターは、インポートするアプリケーションにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用可能にする場合に使用します。</p> <p>このオプションを使用しなければ、実行時のアプリケーションはインポートされますが、サービス・プロバイダーは使用不可になります。インポートされたアプリケーションおよびサービスでサービス要求を受け取ることができるようにするには、サービス・プロバイダーを使用可能にする必要があります。</p>

表 4. `IMPORT` コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-project (-p)	<p><code>designtimeimport</code> の場合にのみオプション。 <code>runtimeimport</code> の場合は適用外。</p> <p>リソースのインポート先プロジェクトの名前を入力します。</p> <p>プロジェクト名を指定しなかった場合には、IMPORT コマンドでは、XML 内のプロジェクト名が使用されます。</p> <p><code>designtimeimport</code> の場合、情報のインポート先プロジェクトの名前は、入力 XML ファイルに定義されます。</p> <p><code>runtimeimport</code> の場合、情報のインポート先アプリケーションの名前は、入力 DAT ファイルに定義されます。</p>
-application (-a)	<p><code>designtimeimport</code> の場合にのみオプション。 <code>runtimeimport</code> の場合は適用外。</p> <p>プロジェクト内にある、インポートするアプリケーションの名前を入力します。</p>
-service (-s)	<p><code>designtimeimport</code> の場合にのみオプション。 <code>runtimeimport</code> の場合は適用外。</p> <p>アプリケーション内にある、インポートするサービスの名前を入力します。</p>
-input (-inp)	<p>必須</p> <p>エクスポートされた情報を読み取るファイルの絶対パス名を入力します。</p>
-verbose (-v)	<p>詳細なランタイム出力 (ランタイム・ロギング・メッセージではない) を表示します。</p>
-results (-res)	<p>すべてのランタイム出力を指定されたファイルに出力します。</p>
-log (-l)	<p>すべてのランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。このオプションは、-loglevel とともに使用します。</p>
-logerror (-error)	<p>すべての <code>ERROR</code> および <code>FATAL</code> の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。</p>
-loginfo (-info)	<p>すべての <code>INFO</code>、<code>WARN</code>、<code>DEBUG</code>、および <code>TRACE</code> の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。</p>

表 4. `IMPORT` コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
<code>-loglevel (-level)</code>	オプション。 出力するロギング・レベルを 1 つ指定します (ALL、TRACE、DEBUG、INFO、WARN、ERROR、FATAL、または OFF)。
<code>-help (-?)</code>	このコマンドのヘルプを表示します。

ENABLE コマンド

このコマンドを使用して、IBM InfoSphere Information Services Director サービス・オペレーションにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用可能にすることができます。

目的

ENABLE コマンドは、実行時のアプリケーション、サービス、およびオペレーションのサービス・プロバイダーを使用可能にします。使用可能になったサービスは、サービス要求を受け取って処理できます。

構文

サービス・プロバイダーを使用可能にするには、特定のアプリケーションに対する方法、またはエージェント・ホストに対する方法の 2 つがあります。

アプリケーションのサービス・プロバイダーを使用可能にするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action enable -user <ユーザー名>
          -password <ユーザー・パスワード>
          -a <アプリケーション名>
```

エージェント・ホストのサービス・プロバイダーを使用可能にするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action enable -user <ユーザー名>
          -password <ユーザー・パスワード>
          -agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名>
```

エージェント・ホストのサービス・プロバイダー・タイプを使用可能にします。さらに、プロバイダー・タイプを使用するか、プロバイダー・タイプとプロバイダー・ホストを組み合わせて使用し、特定のサービス・プロバイダーを使用可能にするには、以下のようになります。

```
ISDAdmin -action enable -user <ユーザー名>
          -password <ユーザー・パスワード>
          -agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名> -providerType <プロバイダー・タイプ>
          -providerHost <DS ホスト名または DB2 サーバー・ホスト名>
```

パラメーター

ENABLE コマンドでは、以下のパラメーターを使用します。

表 5. **ENABLE** コマンドのパラメーター

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-action (-act)	必須 enable または e を入力します。
-user (-ur)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。
-password (-pw)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。
-application (-a)	アプリケーション、サービス、またはオペレーションを使用可能にする場合には必須。 サービス・プロバイダーを使用可能にする対象のアプリケーションの名前を入力します。 -application 、 -service 、および -operation の各パラメーターは、連携して動作します。
-service (-s)	オプション。 サービス・プロバイダーを使用可能にする対象のアプリケーション内のサービスの名前を入力します。
-operation (-o)	オプション。 サービス・プロバイダーを使用可能にする対象のサービス内のオペレーションの名前を入力します。
-agentHost (-ahost)	エージェント・ホストのプロバイダーを使用可能にする場合には必須。 エージェント・サーバーのホスト名を入力します。 -agentHost 、 -providerType 、および -providerHost の各パラメーターは、連携して動作します。

表 5. ENABLE コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-providerType (-prType)	<p>オプション。</p> <p>使用可能にするサービス・プロバイダーのタイプを入力します。</p> <p>-agentHost パラメーターは、-providerType パラメーターとともに指定する必要があります。</p> <p>DataStage の場合は、DS と入力します。</p> <p>DB2 の場合は、DB2 と入力します。</p> <p>Oracle の場合は、ORA と入力します。</p> <p>Classic Federation Server の場合は、DB2CF と入力します。</p>
-providerHost (-pHost)	<p>オプション。</p> <p>プロバイダーを使用可能にするサービス・プロバイダー・サーバーのホスト名を入力します。</p> <p>-agentHost パラメーターは、-providerHost パラメーターとともに指定する必要があります。</p>
-verbose (-v)	<p>オプション。</p> <p>詳細なランタイム出力 (ランタイム・ロギング・メッセージではない) を表示します。</p>
-results (-res)	<p>オプション。</p> <p>すべてのランタイム出力を指定されたファイルに出力します。</p>
-log (-l)	<p>オプション。</p> <p>すべてのランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。このオプションは、-loglevel とともに使用します。</p>
-logerror (-error)	<p>オプション。</p> <p>すべての ERROR および FATAL の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。</p>
-loginfo (-info)	<p>オプション。</p> <p>すべての INFO、WARN、DEBUG、および TRACE の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。</p>

表 5. ENABLE コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-loglevel (-level)	オプション。 出力するロギング・レベルを 1 つ指定します (ALL、TRACE、DEBUG、INFO、WARN、ERROR、FATAL、または OFF)。
-help (-?)	オプション。 このコマンドのヘルプを表示します。

DISABLE コマンド

このコマンドを使用して、IBM InfoSphere Information Services Director サービス・オペレーションにアタッチされたサービス・プロバイダーを使用不可にすることができます。

目的

DISABLE コマンドは、実行時のアプリケーション、サービス、およびオペレーションのサービス・プロバイダーを使用不可にします。サービス・プロバイダーを使用不可にすると、サービス・オペレーションでは、サービス要求を処理できなくなります。

構文

サービス・プロバイダーを使用不可にするには、特定のアプリケーションに対する方法、またはエージェント・ホストに対する方法の 2 つがあります。

アプリケーションのサービス・プロバイダーを使用不可にするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action disable -user
<ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名>
```

エージェント・ホストのサービス・プロバイダーを使用不可にするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action disable -user
<ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード>
-agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名>
```

エージェント・ホストのサービス・プロバイダー・タイプを使用不可にします。さらに、プロバイダー・タイプを使用するか、プロバイダー・タイプとプロバイダー・ホストを組み合わせで使用し、特定のサービス・プロバイダーを使用不可にするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action disable -user <ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード>
-agentHost <エージェント・サーバー・ホスト名> -providerType <プロバイダー・タイプ>
-providerHost <DS ホスト名または DB2 サーバー・ホスト名>
```

パラメーター

DISABLE コマンドでは、以下のパラメーターを使用します。

表 6. **DISABLE** コマンドのパラメーター

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-action (-act)	必須 disable または d と入力します。
-user (-ur)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。
-password (-pw)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。
-application (-a)	アプリケーション、サービス、またはオペレーションを使用不可にする場合には必須。 サービス・プロバイダーを使用不可にする対象のアプリケーションの名前を入力します。 -application 、 -service 、および -operation の各パラメーターは、連携して動作します。
-service (-s)	オプション。 サービス・プロバイダーを使用不可にする対象のアプリケーション内のサービスの名前を入力します。
-operation (-o)	オプション。 サービス・プロバイダーを使用不可にする対象のサービス内のオペレーションの名前を入力します。
-agentHost (-ahost)	エージェント・ホストのプロバイダーを使用不可にする場合には必須。 エージェント・サーバーのホスト名を入力します。 -agentHost 、 -providerType 、および -providerHost の各パラメーターは、連携して動作します。

表 6. DISABLE コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-providerType (-prType)	<p>オプション。</p> <p>使用不可にするサービス・プロバイダーのタイプを入力します。</p> <p>-agentHost パラメーターは、-providerType パラメーターとともに指定する必要があります。</p> <p>DataStage の場合は、DS と入力します。</p> <p>DB2 の場合は、DB2 と入力します。</p> <p>Oracle の場合は、ORA と入力します。</p> <p>Classic Federation Server の場合は、DB2CF と入力します。</p>
-providerHost (-pHost)	<p>オプション。</p> <p>プロバイダーを使用不可にするサービス・プロバイダー・サーバーのホスト名を入力します。</p> <p>-agentHost パラメーターは、-providerHost パラメーターとともに指定する必要があります。</p>
-verbose (-v)	<p>オプション。</p> <p>詳細なランタイム出力 (ランタイム・ロギング・メッセージではない) を表示します。</p>
-results (-res)	<p>オプション。</p> <p>すべてのランタイム出力を指定されたファイルに出力します。</p>
-log (-l)	<p>オプション。</p> <p>すべてのランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。このオプションは、-loglevel とともに使用します。</p>
-logerror (-error)	<p>オプション。</p> <p>すべての ERROR および FATAL の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。</p>
-loginfo (-info)	<p>オプション。</p> <p>すべての INFO、WARN、DEBUG、および TRACE の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。</p>

表 6. DISABLE コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-loglevel (-level)	オプション。 出力するロギング・レベルを 1 つ指定します (ALL、TRACE、DEBUG、INFO、WARN、ERROR、FATAL、または OFF)。
-help (-?)	オプション。 このコマンドのヘルプを表示します。

DEPLOY コマンド

このコマンドを使用することで、IBM InfoSphere Information Services Director プロジェクトのアプリケーションをデプロイできます。これにより、アプリケーション内のサービスでサービス要求を受け取ることができるようになります。

目的

DEPLOY コマンドは、デザイン時のアプリケーションをデプロイし、デプロイ済みアプリケーションをアップグレードします。アプリケーションのデプロイ後には、**DEPLOY** コマンドを使用して、EAR ファイルを再生成することで、アプリケーションおよびサービス・プロバイダーの情報をアップグレードできます。

構文

以下のようにして、選択したデザイン時のアプリケーションをデプロイします。

```
ISDAdmin -action deploy -user <ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード>
-p <プロジェクト名> -a <アプリケーション名 1> -a <アプリケーション名 2>
-a <アプリケーション名 3>
```

EAR ファイルを再生成することで、アプリケーションのみをアップグレードおよび再デプロイするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action deploy -user <ユーザー名>
-password <ユーザー・パスワード>
-replace -preserveProvider -project <プロジェクト名> -a <アプリケーション名 1>
-a <アプリケーション名 2>
```

パラメーター

DEPLOY コマンドでは、以下のパラメーターを使用します。

表 7. DEPLOY コマンドのパラメーター

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-action (-act)	必須 実行するアクション。deploy または dep と入力します。
-user (-ur)	必須 IBM InfoSphere Information Server ユーザー ID。

表 7. DEPLOY コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-password (-pw)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワード。
-project (-p)	必須 デプロイするアプリケーションが入ったプロジェクトの名前。
-application (-a)	必須 デプロイするアプリケーションの名前。
-replace (-rep)	オプション。 検出された一致アプリケーションを再デプロイするパラメーター。 -replace パラメーターを使用しなかった場合には、一致アプリケーションが検出されると警告が表示されて、その新しいアプリケーションはデプロイされません。デプロイするアプリケーションがさらに存在する場合には、DEPLOY コマンドの処理は、次のアプリケーションに移行します。
-preserveProvider (-rep -prp)	オプション。 -preserveProvider パラメーターを -replace パラメーターと組み合わせて使用することで、一致 EAR ファイルのみが置き換えられ、情報サービス・プロバイダーの情報はそのままになります。 -preserveProvider パラメーターは、 -replace パラメーターとともに使用する必要があります。
-verbose (-v)	オプション。 詳細なランタイム出力 (ランタイム・ロギング・メッセージではない) を表示します。
-results (-res)	オプション。 すべてのランタイム出力を指定されたファイルに出力します。
-log (-l)	オプション。 すべてのランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。このオプションは、 -loglevel とともに使用します。

表 7. DEPLOY コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-logerror (-error)	オプション。 すべての ERROR および FATAL の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。
-loginfo (-info)	オプション。 すべての INFO、WARN、DEBUG、および TRACE の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。
-loglevel (-level)	オプション。 出力するロギング・レベルを 1 つ指定します (ALL、TRACE、DEBUG、INFO、WARN、ERROR、FATAL、または OFF)。
-help (-?)	オプション。 このコマンドのヘルプを表示します。

UNDEPLOY コマンド

このコマンドを使用して、IBM InfoSphere Information Services Director からアプリケーションをアンデプロイできます。

目的

UNDEPLOY コマンドは、1 つ以上の実行時のアプリケーションをアンデプロイします。

構文

```
ISDAdmin -action undeploy -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名>
```

パラメーター

UNDEPLOY コマンドでは、以下のパラメーターを使用します。

表 8. UNDEPLOY コマンドのパラメーター

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-action (-act)	必須 undeploy または undep と入力します。
-user (-ur)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。
-password (-pw)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。

表 8. UNDEPLOY コマンドのパラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-application (-a)	必須 アンデプロイするアプリケーションの名前を入力します。
-verbose (-v)	オプション。 詳細なランタイム出力 (ランタイム・ロギング・メッセージではない) を表示します。
-results (-res)	オプション。 すべてのランタイム出力を指定されたファイルに出力します。
-log (-l)	オプション。 すべてのランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。このオプションは、 -loglevel とともに使用します。
-logerror (-error)	オプション。 すべての ERROR および FATAL の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。
-loginfo (-info)	オプション。 すべての INFO、WARN、DEBUG、および TRACE の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。
-loglevel (-level)	オプション。 出力するロギング・レベルを 1 つ指定します (ALL、TRACE、DEBUG、INFO、WARN、ERROR、FATAL、または OFF)。
-help (-?)	オプション。 このコマンドのヘルプを表示します。

UPGRADE コマンド

このコマンドを使用して、デプロイ済み IBM InfoSphere Information Services Director アプリケーション内のアプリケーションおよびサービスの情報をアップグレードできます。

目的

実行時のアプリケーションで、そのアプリケーション用に生成された EAR ファイル内の成果物をアップグレードできるように、**UPGRADE** コマンドがサポートされています。アプリケーション用に EAR ファイルが再生成されます。以下のいずれか

のオプションを使用して、実行時のアプリケーション内のアプリケーションおよびサービスの情報をアップグレードできます。

- オプション 1 - 入力 DAT ファイル内にあるアプリケーションおよびサービス・プロバイダーの情報を使用して、アプリケーションとサービス・プロバイダーの両方の情報を更新できます。このオプションでは、一致アプリケーションを処理するために **replace** パラメーターを指定して、**ISDImportExport runtimeimport** コマンドを使用します。
- オプション 2 - 既存のサービス・プロバイダー情報を置き換えずにアプリケーションを更新できます。このオプションでは、**replace** パラメーターおよび **preserveProvider** パラメーターを指定して、**ISDImportExport runtimeimport** コマンドを使用し、サービス・プロバイダー情報を変更せずに、入力 DAT ファイル内のアプリケーションをデプロイします。
- オプション 3 - EAR ファイルを再生成することで、サービス・プロバイダー情報を変更せずにアプリケーションを更新できます。このオプションでは、アップグレードするアプリケーションの名前を入力として使用します。アプリケーションを再デプロイできるように、デザイン・メタデータが環境内で使用可能である必要があります。このオプションでは、**replace** パラメーターおよび **preserveProvider** パラメーターを指定して、**ISDAdmin deploy** コマンドを使用し、サービス・プロバイダー情報を変更せずに新規 EAR ファイルをデプロイします。

構文

アプリケーションおよびそのサービス・プロバイダー情報をアップグレードするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -replace -input <新しい情報の読み取り元 DAT ファイルの絶対パス名>
```

入力 DAT ファイルを使用して、アプリケーションのみをアップグレードするには、以下のようにします。

```
ISDImportExport -action runtimeimport -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -replace -preserveProvider -input <新しい情報の読み取り元 DAT ファイルの絶対パス名>
```

EAR ファイルを再生成することで、アプリケーションのみをアップグレードするには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action deploy -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード> -replace -preserveProvider -a <アプリケーション 1> -a <アプリケーション 2>
```

パラメーター

UPGRADE コマンドでは、以下のパラメーターを使用します。

表 9. UPGRADE パラメーター

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-action (-act)	<p>必須</p> <p>以下のように、実行するアクションを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> アプリケーションおよびそのサービス・プロバイダー情報をアップグレードする場合には、runtimeimport または rti と入力します。 入力 DAT ファイルを使用してアプリケーションをアップグレードする場合には、runtimeimport または rti と入力します。 EAR ファイルを再生成してアプリケーションをアップグレードする場合には、deploy または dep と入力します。
-user (-ur)	<p>必須</p> <p>IBM InfoSphere Information Server ユーザー ID。</p>
-password (-pw)	<p>必須</p> <p>IBM InfoSphere Information Server パスワード。</p>
-replace (-rep)	<p>オプション 1 の場合は必須。</p> <p>検出された一致アプリケーションを置き換える場合に使用する新規名。既存アプリケーションは削除され、インポートされたデータを使用して再作成されます。</p>
-replace -preserveProvider (-rep -prp)	<p>オプション 2 およびオプション 3 の場合は必須。</p> <p>2 つのパラメーターを組み合わせ使用し、一致アプリケーションを置き換え、情報サービス・プロバイダーの情報をそのままにします。</p> <p>-preserveProvider パラメーターを有効にするには、-replace パラメーターとともに使用する必要があります。</p>
-application (-a)	<p>オプション。</p> <p>更新するアプリケーションの名前。</p>

表9. UPGRADE パラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-input (-inp)	オプション。 新しい情報の読み取り元ファイルの絶対パス名。
-verbose (-v)	オプション。 詳細なランタイム出力 (ランタイム・ロギング・メッセージではない) を表示します。
-results (-res)	オプション。 すべてのランタイム出力を指定されたファイルに出力します。
-log (-l)	オプション。 すべてのランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。このオプションは、 -loglevel とともに使用します。
-logerror (-error)	オプション。 すべての ERROR および FATAL の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。
-loginfo (-info)	オプション。 すべての INFO、WARN、DEBUG、および TRACE の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。
-loglevel (-level)	オプション。 出力するロギング・レベルを 1 つ指定します (ALL、TRACE、DEBUG、INFO、WARN、ERROR、FATAL、または OFF)。
-help (-?)	オプション。 このコマンドのヘルプを表示します。

UPDATE コマンド

アプリケーションまたはサービス・プロバイダーをインポートした後に、一部のメタデータ情報が、インポートされた環境内のメタデータ情報に一致しない場合があります。 **UPDATE** コマンドを使用することで、リポジトリ内のメタデータ情報を直接更新して、新しい環境内のメタデータ情報に一致するようにします。

制約事項: 一度に更新できるメタデータ属性は 1 つのみです。複数のメタデータ属性を更新する必要がある場合には、メタデータ属性ごとに個別の **UPDATE** コマンドを実行する必要があります。

目的

UPDATE コマンドは、実行時のアプリケーションおよび IBM InfoSphere Information Server 接続のメタデータ情報を更新します。メタデータ更新オペレーションのスコープは、エージェント・ホスト名、アプリケーション名、または接続名を検索することで決定されます。入力するメタデータ **UPDATE** コマンドごとに、キー (**-agenthost**、**-application**、または **-cname**) を 1 つ指定する必要があります。

構文

指定したアプリケーションのメタデータ情報を更新するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-a <アプリケーション名> -s <サービス名> -o <オペレーション名>
-key <更新するメタデータ属性のキー>
-subkey <変更するジョブ・パラメーターの引数>
-oldvalue <変更する属性の古い値>
-newvalue <変更する属性の新しい値>
-dsproject <プロジェクト名> -dsjob <ジョブ名> -providerUser <サービス・プロバイダー>
```

指定したエージェント・サーバー・ホストのメタデータ情報を更新するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-agentHost <エージェント・ホスト名> -providerType <DS、DB2、ORA、または DB2CF>
-providerHost <サービス・プロバイダー・サーバー・ホスト名>
-key <更新するメタデータ属性のキー>
-subkey <変更するジョブ・パラメーターの引数>
-oldvalue <変更する属性の古い値>
-newvalue <変更する属性の新しい値>
-dsproject <プロジェクト名> -dsjob <ジョブ名> -providerUser <サービス・プロバイダー>
```

指定した接続のメタデータ情報を更新するには、以下のようにします。

```
ISDAdmin -action update -user <ユーザー名> -password <ユーザー・パスワード>
-cname <接続名> -key <更新するメタデータ属性のキー>
-oldvalue <変更する属性の古い値>
-newvalue <変更する属性の新しい値>
```

アプリケーション・メタデータ・パラメーター

UPDATE コマンドでは、以下のパラメーターを使用します。このコマンドは、3 つの方法 (アプリケーション用、エージェント・ホスト用、または接続名用) で使用できます。方法ごとに、必須オプションおよび任意指定のオプションが異なります。入力するメタデータ **UPDATE** コマンドごとに、オプション (**-agenthost**、**-application**、または **-cname**) を 1 つ指定する必要があります。

表 10. アプリケーション・メタデータ・パラメーター

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-action (-act)	必須 update と入力します。
-user (-ur)	必須 IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。

表 10. アプリケーション・メタデータ・パラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-password (-pw)	<p>必須</p> <p>IBM InfoSphere Information Server パスワードを入力します。</p>
-application (-a)	<p>オプション。</p> <p>特定のアプリケーションのスコープ内でメタデータの更新を適用する場合には、-a パラメーターを使用します。</p> <p>メタデータを更新するアプリケーションの名前を入力します。アプリケーション名を使用して、オペレーションおよびプロバイダーのメタデータの更新を限定または制限できません。</p>
-agentHost (-ahost)	<p>オプション。</p> <p>特定のエージェントのスコープ内でメタデータの更新を適用する場合には、-ahost パラメーターを使用します。</p> <p>注: エージェント・ホストは、その値を変更する必要がある場合にキーとして使用することもできます。</p> <p>エージェント・サーバーのホスト名を入力します。</p>
-cname (-c)	<p>オプション。</p> <p>InfoSphere Information Server 接続のスコープ内でメタデータの更新を適用する場合には、-c パラメーターを使用します。</p> <p>サービス・プロバイダーと InfoSphere Information Server 間の接続に割り当てる名前を入力します。</p>
-key (-k)	<p>必須</p> <p>更新するキーを入力します。例えば、DataStage パスワードを更新する場合には、DS_PASSWORD と入力します。キーが別のオプションに関連している場合には、キーの後にそれらのオプションのパラメーターを入力します。</p> <p>サポートされるキー、および他のオプションに対する各キーの依存関係の詳細については、このトピック内のこれ以降の表で示します。</p>

表 10. アプリケーション・メタデータ・パラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-subkey (-sk)	<p>オプション。</p> <p>-subkey は、ジョブ・パラメーター設定を更新する場合に使用します。</p> <p>変更する設定の引数を入力します。</p>
-service (-s)	<p>オプション。</p> <p>メタデータを更新するアプリケーション内のサービスの名前を入力します。このパラメーターは、-application パラメーターとともに使用されます。</p>
-operation (-o)	<p>オプション。</p> <p>メタデータを更新するサービス内のオペレーションの名前を入力します。このパラメーターは、-application パラメーターおよび -service パラメーターとともに使用されます。</p>
-oldvalue (-ov)	<p>オプション。</p> <p>-oldvalue は、メタデータ属性を更新するために以下のいずれかのキー値を使用する場合に使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DS_USERID • DS_JOBNAME • DS_PROJECT_NAME • DB2_HOST • DB2_DATABASE • DB2_PORT • DB2_USERID <p>注: 指定可能な値が複数存在するキーで特定の値を指定する必要がある場合に、このパラメーターは必須になります。それ以外のすべての場合 (更新するキーに指定可能な値が 1 つしかない場合) は、このパラメーターはオプションです。そのため、指定可能な値が 1 つしかないシナリオでは、値を指定する必要はありません。</p> <p>更新する項目の既存値をそのまま入力します。</p>
-newvalue (-nv)	<p>必須</p> <p>更新するメタデータ属性に割り当てる新しい値を入力します。</p>

表 10. アプリケーション・メタデータ・パラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-providerType (-prType)	<p>オプション。</p> <p>以下のサービス・プロバイダーのいずれかを更新する場合には、-providerType を使用する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DataStage の場合は、DS と入力します。 • DB2 の場合は、DB2 と入力します。 • Oracle の場合は、ORA と入力します。 • Classic Federation Server の場合は、DB2CF と入力します。
-providerUser (-pUr)	<p>オプション。</p> <p>サービス・プロバイダー・パスワードを更新する場合には、-providerUser を使用する必要があります。</p> <p>サービス・プロバイダーのユーザー名を入力します。</p>
-dsproject (-dsp)	<p>オプション。</p> <p>ジョブ名を更新する場合には、このパラメーターを使用できます。</p> <p>メタデータを更新するプロジェクトの名前を入力します。</p> <p>注: また、このパラメーターを使用して、ジョブのパラメーターを更新するときに、オペレーションにアタッチされる特定のプロジェクトを指定することもできます。</p>
-dsjob (-dsj)	<p>オプション。</p> <p>メタデータを更新するジョブの名前を入力します。</p> <p>注: このパラメーターを使用して、DataStage ジョブのパラメーターを更新するときに、オペレーションにアタッチされる特定のジョブを指定することもできます。</p>
-providerHost (-pHost)	<p>オプション。</p> <p>DB2 データベース名、DB2 ポート、DB2 ユーザー ID、または DB2 パスワードを更新する場合には、-pHost を使用する必要があります。</p> <p>サービス・プロバイダーのホスト・サーバーの名前を入力します。</p>

表 10. アプリケーション・メタデータ・パラメーター (続き)

パラメーター名 (ショート・ネーム)	説明
-verbose (-v)	オプション。 詳細なランタイム出力 (ランタイム・ロギング・メッセージではない) を表示します。
-results (-res)	オプション。 すべてのランタイム出力を指定されたファイルに出力します。
-log (-l)	オプション。 すべてのランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。このオプションは、 -loglevel とともに使用します。
-logerror (-error)	オプション。 すべての ERROR および FATAL の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。
-loginfo (-info)	オプション。 すべての INFO 、 WARN 、 DEBUG 、および TRACE の各ランタイム・ロギング・メッセージを指定されたファイルに出力します。
-loglevel (-level)	オプション。 出力するロギング・レベルを 1 つ指定します (ALL 、 TRACE 、 DEBUG 、 INFO 、 WARN 、 ERROR 、 FATAL 、または OFF)。
-help (-?)	オプション。 このコマンドのヘルプを表示します。

オペレーション・キー

以下のキーの値を変更して、オペレーション・メタデータを更新できます。これらのキーには、他のパラメーターに対する依存関係はありません。

表 11. オペレーション・メタデータ・キー

キー名	説明
MAX_QUEUE_SIZE	オペレーション・キュー内に同時に入れることができるサービス要求の最大数。
MAX_QUEUE_WAIT	オペレーション・キュー内でサービス要求を待機させる最大時間。

表 11. オペレーション・メタデータ・キー (続き)

キー名	説明
MAX_RETRIES	サービス要求が初回で受け取られなかった場合に、サーバーへのサービス要求を試行する最大回数。この設定は、要求の送信先 ASB エージェントが複数存在する場合にのみ適用されます。
LOAD_BALANCER	複数のサービス・プロバイダーが同じオペレーションにアタッチされている場合に、サービス要求をサーバーに送信する際に使用するメソッド。

共通プロバイダー・キー

以下のキーの値を変更して、共通プロバイダー・メタデータを更新できます。これらのキーには、他のパラメーターに対する依存関係はありません。

表 12. 共通プロバイダー・キー

キー名	説明
ACTIVATION_DELAY	指定した数 (ACTIVATION_THRESHOLD で設定) のサービス要求がオペレーション・キュー内に入るまで、サービス・プロバイダーが別のジョブまたはサーバー接続を開始しない時間 (ミリ秒)。
ACTIVATION_THRESHOLD	指定した時間 (ACTIVATION_DELAY で設定) の間、この数に達するまでサービス・プロバイダーが別のジョブまたはサーバー接続を開始できない、オペレーション・キュー内のサービス要求の数。オペレーション・キュー内のサービス要求の数にのみ適用され、パイプライン内のサービス要求の数は含まれません。
AGENT_HOST	サービス・プロバイダーと通信するエージェント・サーバーのホスト名。
AGENT_PORT	サービス・プロバイダーにアクセスするために使用するエージェント・サーバーのポート番号。
MAX_ACTIVE	同時にアクティブにすることができる、ジョブ・インスタンスまたはサーバー接続の最大数。この最大数に到達すると、サービス・プロバイダーは、新しいジョブおよび接続を開始できません。
MAX_IDLE	ジョブ・インスタンスまたは接続をアイドル状態のままにすることができる最大時間 (秒)。この時間に到達すると、停止されます。ジョブまたは接続がアイドル状態になり得る時間に既知の限度がある場合に、最大アイドル時間を設定できます。

表 12. 共通プロバイダー・キー (続き)

キー名	説明
MAX_RUNTIME	サービス要求を処理するためにジョブが使用する最大時間。最大実行時間に到達すると、ジョブはパイプライン内の要求は処理しますが、それ以降の要求でそのジョブを使用することはできません。
MIN_ACTIVE	同時にアクティブにすることができる、ジョブ・インスタンスまたはサーバー接続の最小数。最小数は、少なくとも 1 つのジョブまたはサーバー接続が常に実行中であることを指します。
MIN_IDLE	ジョブ・インスタンスまたは接続をアイドル状態のままにすることができる時間 (秒)。この時間に到達すると、停止されます。
REQUEST_LIMIT	ジョブ・インスタンスが同時に処理するサービス要求の最大数。InfoSphere DataStage などの一部のサービス・プロバイダーのみがこの機能を備えています。
STUCK_TIMEOUT	サービス・プロバイダーがオペレーションを処理する時間 (秒)。この時間に到達すると、エラーが返されます。

IBM InfoSphere DataStage プロバイダー・キー

以下のキーの値を変更して、InfoSphere DataStage プロバイダーのメタデータを更新できます。これらのキーの一部は、依存するオプションとともに使用する必要があります。

表 13. InfoSphere DataStage プロバイダー・キー

キー名	説明
DS_PROJECT_NAME	メタデータを更新する新しい IBM InfoSphere DataStage プロジェクトの名前。
DS_JOBNAME	メタデータを更新する新しい InfoSphere DataStage ジョブの名前。
DS_USERID	InfoSphere Information Server エンジン・ユーザー ID。
DS_PASSWORD	InfoSphere Information Server エンジン・パスワード。 -providerUser (ログイン・ユーザー ID) とともに使用します。
DS_HOST	InfoSphere Information Server エンジンのホスト名またはサーバー名。
DS_JOBTYPE	InfoSphere DataStage ジョブのタイプ。
DS_PORT	InfoSphere Information Server エンジンにアクセスするために使用するポート番号。

表 13. InfoSphere DataStage プロバイダー・キー (続き)

キー名	説明
JOB_PARAMETER	メタデータを更新するジョブ・パラメーターの名前。

IBM DB2 プロバイダー・キー

以下のキーの値を変更して、DB2 プロバイダーのメタデータを更新できます。これらのキーの一部は、依存するオプションとともに使用する必要があります。

制約事項: UPDATE コマンドは、DB2 の単一インストール済み環境を持つコンピューターでのみ使用できます。

表 14. IBM DB2 Server プロバイダー・キー

キー名	説明
DB2_USERID	DB2 サーバー・ユーザー ID。 -providerHost (DB2 サーバー名) とともに使用します。
DB2_PASSWORD	DB2 サーバー・パスワード。 -providerUser (DB2 ユーザー ID) とともに使用します。
DB2_HOST	DB2 サーバーのホスト名またはサーバー名。
DB2_PORT	DB2 サーバーにアクセスするために使用するポート番号。
DB2_DATABASE	DB2 データベースの名前。

Oracle データベース・プロバイダー・キー

以下のキーの値を変更して、Oracle プロバイダーのメタデータを更新できます。

制約事項: UPDATE コマンドは、Oracle の単一インストール済み環境を持つコンピューターでのみ使用できます。

表 15. Oracle データベース・プロバイダー・キー

キー名	説明
ORA_USERID	Oracle データベース・サーバー・ユーザー ID。
ORA_PASSWORD	Oracle データベース・サーバー・パスワード。 -providerUser (Oracle ユーザー ID) とともに使用します。
ORA_HOST	Oracle サーバーのホスト名またはサーバー名。
ORA_PORT	Oracle サーバーにアクセスするために使用するポート番号。
ORA_DATABASE	Oracle データベースの名前。

IBM InfoSphere Classic Federation Server for z/OS® サーバー・メタデータ・キー

以下のキーの値を変更して、InfoSphere Classic Federation Server for z/OS のメタデータを更新できます。

表 16. InfoSphere Classic Federation Server for z/OS データベース・プロバイダー・キー

キー名	説明
DB2CF_USERID	InfoSphere Classic Federation Server for z/OS ユーザー ID。
DB2CF_PASSWORD	InfoSphere Classic Federation Server for z/OS パスワード。 - providerUser (Classic Federation ユーザー ID) とともに使用します。
DB2CF_HOST	InfoSphere Classic Federation Server for z/OS のホスト名またはサーバー名。
DB2CF_PORT	InfoSphere Classic Federation Server for z/OS サーバーにアクセスするために使用するポート番号。
DB2CF_DATABASE	InfoSphere Classic Federation Server for z/OS のデータベースの名前。

接続メタデータ・キー

以下のキーの値を変更して、InfoSphere Information Server 接続のメタデータを変更できます。

表 17. 接続メタデータ・キー

キー名	説明
USER	DataStage または DB2 サーバーのユーザー ID。
PASSWORD	DataStage または DB2 サーバーのパスワード。 - providerUser (プロバイダー・ユーザー ID) とともに使用します。
HOSTNAME	DB2 接続の場合のみ。 DB2 サーバーのホスト名またはサーバー名。
PORT	DataStage または DB2 サーバーにアクセスするために使用するポート番号。
DBNAME	DB2 接続の場合のみ。 DB2 データベースの名前。

製品のアクセシビリティ

IBM 製品のアクセシビリティ対応状況についての情報を入手できます。

IBM InfoSphere Information Server 製品のモジュールおよびユーザー・インターフェースは完全にはアクセシビリティ対応がなされていません。インストール・プログラムは、次の製品モジュールとコンポーネントをインストールします。

- IBM InfoSphere Business Glossary
- IBM InfoSphere Business Glossary Anywhere
- IBM InfoSphere DataStage
- IBM InfoSphere FastTrack
- IBM InfoSphere Information Analyzer
- IBM InfoSphere Information Services Director
- IBM InfoSphere Metadata Workbench
- IBM InfoSphere QualityStage™

IBM 製品のアクセシビリティ対応状況の詳細は、http://www.ibm.com/able/product_accessibility/index.html をご覧ください。

アクセシビリティ対応資料

インフォメーション・センターには、InfoSphere Information Server 製品のアクセシビリティ対応資料が用意されています。インフォメーション・センターでは、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で資料を提供しています。XHTML により、使用しているブラウザーに設定されている表示形式で資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーやその他の支援技術を使用して、資料にアクセスすることもできます。

IBM のアクセシビリティ

アクセシビリティに関する IBM のコミットメントについては、IBM Human Ability and Accessibility Center を参照してください。

製品資料

資料は、製品のクライアント・インターフェースから直接開くことができるヘルプ、スイート全体に渡るインフォメーション・センター、および PDF ファイルのブックなど、さまざまな場所および形式で提供されます。

以下の Web で最新情報を入手できます。

www.ibm.com/jp/software/data/ (日本語のサイト)

www.ibm.com//software/data/integration/info_server/ (英語のサイト)

インフォメーション・センターは、IBM InfoSphere Information Server に付属した共通サービスとしてインストールされます。インフォメーション・センターには、スイートのすべての製品モジュールの完全な資料だけでなく、ほとんどの製品インターフェースのヘルプも含まれています。インフォメーション・センターは、インストール済み製品から開くことも、Web ブラウザーから開くこともできます。

インフォメーション・センター

次の方法でインストール済みのインフォメーション・センターを開くことができます。

- クライアント・インターフェースで、画面右上の「ヘルプ」リンクをクリックします。

注: IBM InfoSphere FastTrack および IBM InfoSphere Information Server Manager から、メインのヘルプ項目がローカルのヘルプ・システムを開きます。「ヘルプ」>「インフォメーション・センターを開く」を選択して、全スイートのインフォメーション・センターを開きます。

- F1 キーを押します。F1 キーを押すと、通常、クライアント・インターフェースの現行コンテキストを説明するトピックが開きます。

注: F1 キーは、Web クライアントでは機能しません。

- 製品にログインしていないときでも、インストールされたインフォメーション・センターには Web ブラウザーを使用してアクセスできます。Web ブラウザーで、アドレス `http://host_name:port_number/infocenter/topic/com.ibm.swg.im.iis.productization.iisinfsv.home.doc/ic-homepage.html` を入力します。host_name はインフォメーション・センターがインストールされているサービス層コンピューターの名前で、port_number は InfoSphere Information Server のポート番号です。デフォルトのポート番号は 9080 です。例えば、「iisdocs2」という名前の Microsoft® Windows® Server コンピューターの場合、Web アドレスの形式は次のようになります。`http://iisdocs2:9080/infocenter/topic/com.ibm.swg.im.iis.productization.iisinfsv.nav.doc/dochome/iisinfsv_home.html`

インフォメーション・センターのサブセットも IBM Web サイトの `publib.boulder.ibm.com/infocenter/iisinfsv/v8r5/index.jsp` から利用可能で、これは適宜更新されます。

PDF およびハードコピー資料の入手

- PDF ファイルのブックは、InfoSphere Information Server ソフトウェア・インストーラーおよび配布メディアを通して利用可能です。PDF ファイル・ブックのサブセットもオンラインで www.ibm.com/support/docview.wss?rs=14&uid=swg27008803 から利用可能で、これは適宜更新されます。
- IBM 資料は、オンラインでダウンロード、または IBM 担当員を通じてご注文いただけます。資料をオンラインでダウンロードするには www.ibm.com/shop/publications/order の IBM Publications Center にアクセスしてください。

他社の Web サイトへのリンク

このインフォメーション・センターは、IBM 以外の Web サイトおよびリソースへのリンクまたは参照を含む場合があります。

IBM は、IBM Web サイトより参照もしくはアクセスできる、または IBM Web サイトにリンクされた Lenovo 社の Web サイトを含む IBM 以外の Web サイトもしくは第三者のリソースに対して一切の責任を負いません。IBM 以外の Web サイトにリンクが張られていることにより IBM が当該 Web サイトを推奨するものではなく、またその内容、使用もしくはサイトの所有者について IBM が責任を負うことを意味するものではありません。また、IBM は、お客様が IBM Web サイトから第三者の存在を知ることになった場合にも（もしくは、IBM Web サイトから第三者へのリンクを使用した場合にも）、お客様と第三者との間のいかなる取引に対しても一切責任を負いません。従って、お客様は、IBM が上記の外部サイトまたはリソースの利用について責任を負うものではなく、また、外部サイトまたはリソースからアクセス可能なコンテンツ、サービス、製品、またはその他の資料一切に対して IBM が責任を負うものではないことを承諾し、同意するものとします。

お客様が IBM 以外の Web サイトにアクセスされた場合、それが IBM ロゴを含んでいる場合でも、これらの Web サイトは、IBM から独立して運営されており、IBM は、当該 Web サイトの内容に関していかなる責任も負わないことをご了承ください。ウイルス、ワーム、トロイの木馬、およびその他の有害なプログラムに対する予防措置を講じること、およびお客様がしかるべき措置が必要であると考えた場合の情報の保護は、お客様の責任で講じていただきます。

特記事項および商標

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒242-8502
神奈川県大和市下鶴間1623番14号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
J46A/G4
555 Bailey Avenue
San Jose, CA 95141-1003 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、さまざまなオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布するこ

とができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは特定物として現存するまま提供し、法律上の瑕疵担保責任を含むいかなる保証責任も負いません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名は、IBM または各社の商標です。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

IT Infrastructure Library は英国 Office of Government Commerce の一部である the Central Computer and Telecommunications Agency の登録商標です。

インテル、Intel、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Intel Centrino、Intel Centrino ロゴ、Celeron、Intel Xeon、Intel SpeedStep、Itanium、Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

ITIL は英国 Office of Government Commerce の登録商標および共同体登録商標であって、米国特許商標庁にて登録されています。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Cell Broadband Engine, Cell/B.E は、米国およびその他の国における Sony Computer Entertainment, Inc. の商標であり、同社の許諾を受けて使用しています。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

IBM の窓口

お客様サポート、ソフトウェア・サービス、製品情報、および全般情報について、IBM と連絡を取ることができます。また、製品についてのフィードバックを行うことができます。

次の表に、お客様サポート、ソフトウェア・サービス、研修、製品およびソリューション情報に関するリソースをリストしています。

表 18. IBM リソース

リソース	説明と場所
IBM サポート・ポータル	サポート情報は、 www.ibm.com/support/entry/portal/Software/Information_Management/InfoSphere_Information_Server で、製品と関心のあるトピックを選択してカスタマイズできます。
ソフトウェア・サービス	ソフトウェア、IT、およびビジネス・コンサルティング・サービスについての情報は、「ソリューション」サイト www.ibm.com/businesssolutions/jp/ja にアクセスしてください。
My IBM	www.ibm.com/account/jp/ja/ の「My IBM」サイトでアカウントを作成し、特定のテクニカル・サポートのニーズに合うように、IBM Web サイトおよび情報へのリンクを管理できます。
研修と認定	個人、法人、および公共団体向けに、IT 技術の習得、維持、最適化を目的としてデザインされた技術研修およびサービスについては、 http://www.ibm.com/software/sw-training/ にアクセスしてください。
IBM 担当員	ソリューションについて IBM 担当員と連絡を取るには、 www.ibm.com/connect/ibm/us/en/ にアクセスしてください。

フィードバックの提供

次の表は、製品についてのフィードバックを行う方法を示しています。

表 19. IBM へのフィードバックの提供

フィードバックの種類	操作
製品のフィードバック	www.ibm.com/software/data/info/consumability-survey の「Consumability Survey」を通して、全般的な製品のフィードバックを行うことができます。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

- アプリケーションのアップグレード 10, 14
- アプリケーションのアンデプロイ 10, 14
- アプリケーションのインポート 5
- アプリケーションのエクスポート 5, 7
- アプリケーションのデプロイ 10, 13
 - アプリケーションの移動 5
 - アプリケーションのインポート 7
 - アプリケーションのエクスポート 5
 - アプリケーションのバックアップ 5, 7
- アプリケーション・メタデータ・パラメーター 40
- お客様サポート 61
- オペレーション・パラメーター 40

[カ行]

- 概要 1
- 管理およびデプロイメント・コマンド・ライン・インターフェース
 - 概要 1
 - 管理コマンド 1
 - ユーザー・シナリオ 1
- 管理およびデプロイメント・ツールアクセス 1
 - 概要 1
 - 管理コマンド 1
 - コマンド・ライン・インターフェース 1
 - コマンド・リファレンス 21
 - サポートされるコマンド 21
 - 説明 1
 - ユーザー・シナリオ 1
- 共通プロバイダー・パラメーター 40

構成

- DEPLOY コマンド 34
- DISABLE コマンド 31
- ENABLE コマンド 28
- EXPORT コマンド 22
- IMPORT コマンド 24
- UNDEPLOY コマンド 36
- UPDATE コマンド 40

構成 (続き)

- UPGRADE コマンド 37
- 構文
- DEPLOY コマンド 34
 - DISABLE コマンド 31
 - ENABLE コマンド 28
 - EXPORT コマンド 22
 - IMPORT コマンド 24
 - UNDEPLOY コマンド 36
 - UPDATE コマンド 40
 - UPGRADE コマンド 37
- コマンド・ライン・インターフェース
- コマンド・リファレンス 21
 - サポートされない機能 4
 - 制約 4
- コマンド・ライン・サポート
- コマンド 2
 - 説明 2
 - ユーザビリティ 2
- コマンド・リファレンス 21

[サ行]

- サービス・プロバイダーを使用可能にする 10
- サービス・プロバイダーを使用不可能にする 10, 11
- サポート
 - お客様 61
 - サポートされない機能 4
 - サポートされるコマンド 1, 2, 21
 - 製品のアクセシビリティ
 - アクセシビリティ 51
 - 制約 4
- 接続パラメーター 40
- ソフトウェア・サービス 61

[タ行]

- 他社の Web サイトへのリンク 55
- 特記事項 57

[ハ行]

- パラメーター
- DEPLOY コマンド 34
 - DISABLE コマンド 31
 - ENABLE コマンド 28
 - EXPORT コマンド 22

パラメーター (続き)

- IMPORT コマンド 24
 - UNDEPLOY コマンド 36
 - UPDATE コマンド 40
 - UPGRADE コマンド 37
- プロジェクトの管理
- アプリケーションのアップグレード 10, 14
 - アプリケーションのアンデプロイ 10, 14
 - アプリケーションのデプロイ 10, 13
 - サービス・プロバイダーを使用可能にする 10
 - サービス・プロバイダーを使用不可能にする 10
 - メタデータの更新 10, 16
- プロジェクト・コンポーネントの管理
- サービス・プロバイダーを使用可能にする 10
 - サービス・プロバイダーを使用不可能にする 11
- プロバイダー・キー・パラメーター
- 共通プロバイダー 40
 - DB2 サーバー 40
 - InfoSphere Classic Federation Server 40
 - InfoSphere DataStage 40

[マ行]

- メタデータの更新 10, 16

[ヤ行]

- ユーザー許可 1
- ユーザー・シナリオ 1
- ユーザー・ロール 1
- ユーザビリティ 2

D

- DataStage プロバイダー・パラメーター 40
- DEPLOY コマンド 34
- DISABLE コマンド 31

E

- ENABLE コマンド 28
- EXPORT コマンド 22

I

IBM DB2 プロバイダー・パラメーター
40
IMPORT コマンド 24
InfoSphere Classic Federation Server プロ
バイダー・パラメーター 40

U

UNDEPLOY コマンド 36
UPDATE コマンド 40
UPGRADE コマンド 37

W

Web サイト
IBM 以外 55



Printed in Japan

SA88-4525-00



日本アイ・ビー・エム株式会社

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21